

マレーシアの文化を生かした総合的な学習の時間の実践

前在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校 教諭

群馬大学共同教育学部附属小学校 教諭 長嶋 愛香

キーワード マレーシア、食文化、衣文化、総合的な学習の時間

赴任校の概要（2025年3月11日現在）

在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校

The Japanese School (Johor)

URL : <https://www.jsj-malaysia.com/>

1 はじめに

私が赴任したマレーシアは、多民族国家と言われ、多くの民族が共生している国である。大半はマレー系マレーシア人であるが、インド系マレーシア人や中華系マレーシア人の割合も多く、この3つの民族を三大民族としている。マレーシアでは、民族によって、宗教や言語、教育、食文化等を異にしながら、1つの国として政治や経済活動を行っている。

赴任中は、三大民族との交流につながる学校行事の企画・運営に携わってきた。中でも、マレー系の公立小学校「SK BANDAR SERI ALAM（以下「スリアラムI校」）」とは、毎年、先生方と情報交換や現地交流を行ってきた。その縁もあり、私が受け持った小学部5年生の総合的な学習の時間には、教室にスリアラムI校の児童を招いて、交流することができた。こうした交流を通して、マレー系マレーシア人の食文化や衣文化への興味・関心が高まり、私も子どもたちも、総合的な学習の時間に扱う教材として「ナシレマ」「オンデオンデ」「バティック」といった、マレーシアの食文化や衣文化に関わるものにしたいという思いに至った。その記録として、本稿を執筆した。

2 食文化を生かした実践例の紹介

ジョホール日本人学校での2年目に受け持っていた小学部5年生の11名の子どもたちと、小学部6年生の2名の計13名で、「マレーシアの文化と産業」という方向性で、4月に総合的な学習の時間の学習をスタートした。その中で、マレーシアの国民食と呼ばれる「ナシレマ（ココナッツミルクで炊いたご飯のこと）」と、マレー系マレーシア人のおやつ1つ「オンデオンデ（甘いお菓子）」に興味を示す子が多かったため、まずは1学期に、自分たちで作り方を調べ、調理実習を行うことにした。子どもたちにとって、マレーシアの屋台を始め、スーパーなどで目にするこの2つは、幾分身近なものだったようである。日本語で作り方を説明しているインターネット上の情報や、日本語が堪能な事務職員からのアドバイス等を受け、意外と簡単に作ることができた。

その後、子どもたちはアレンジレシピを考案したいという思いを膨らませ、夏休み中に各家庭で日本の食材とコラボレーションした「ナシレマ」や「オンデオンデ」を作り、写真等を交えて、9月に発表会を行った。

しかし、その後の課題設定に苦慮していたので、現地のゲストティーチャーを教室に招聘し、「ナシレマ」や「オンデオンデ」の現地の方のアレンジレシピを教えてもらうことにした。このゲストティーチャーは、6年生の担任

教諭と学習の進め方を相談する中で、ゲストティーチャーをお願いできそうな現地の方と最近知り合ったという話から、たまたま巡り会えた人材である。このゲストティーチャーから「紫いもを使ったオンデオンデ」の話を聞き、マレーシアのスーパーでよく売られているいもを使ったオンデオンデのレシピを考案した。



ゲストティーチャーにいただいた資料

「ナシレマ」のアレンジよりも「オンデオンデ」のアレンジの方が手軽で取り組みやすかったこともあり、クラス全体で「オンデオンデ」のアレンジレシピを2学期は調理実習することにした。話し合いの結果、夏休み中のアレンジレシピの中で最も人気だった「いちごオンデ」とゲストティーチャーからいただいた「紫いもオンデ」、そして、オレンジ色の鮮やかないもを使った「オレンジいもオンデ」の3つを作り、全校児童生徒に振る舞う「おいで!オンデparty!」を企画し、実行した。

「おいで!オンデparty!」では、小学部1年生から中学部3年生までの子どもたちに2種類のオンデオンデを試食してもらい、どの味が気に入ったかを投票してもらった。この試みにより、それまでマレーシアのお菓자에親しみのなかった日本人学校の子もいたが、全校児童生徒にその存在を紹介し、親しんでもらうことができた。

1学期の調理実習の様子や2学期の「おいで!オンデparty!」の様子をプレゼンテーション資料にまとめ、子どもたちは3学期の学習発表会で、全校児童生徒や保護者に自分たちの学びを紹介し、この学習を締めくくった。

3 衣文化を生かした実践例の紹介

ジョホールの日本人学校の3年目には、小学部5年生8人と総合的な学習の時間をスタートした。2年目同様「マレーシアの文化と産業」という広いテーマの中から、すぐに「バティック」というインドネシアから伝わる染め物に対象が定まった。8人の子どもたちは、4年生の時に「マレー文化村」を訪問し、バティック染め体験をしていたが、蠟で下絵を描く過程を経験していなかったため、もっと追究したいという思いを抱いたようだった。そこで、現地の事務職員から情報を得て、ジョホールにある工芸センターを訪問し、一からバティック染めを体験できるよう6月に校外学習を計画した。工芸センターでは、予め自分で描いたイラストを、布に鉛筆で転写し、鉛筆の線をなぞるようにして、溶かした蠟を布にしみこませた。そして、蠟からはみ出ないように専用の絵の具で色づけをして乾かしたら、オリジナルバティックが完成する。さらに、7月に5・6年生合同で行く修学旅行先でもバティック工場を訪問できるよう計画し、工場でも色づけに特化したバティック染め体験をしてきた。

これら体験ベースの1学期の学びを、2学期はプレゼンテーション資料にまとめ、修学旅行に一緒に行った6年生にバティックの歴史等を紹介したり、新聞の形式にまとめた物を保護者や全校児童生徒に配付したりして、バティックの魅力を発信する活動に取り組んだ。

しかし、この年も子どもたちは、この後の課題設定に苦慮することになる。そこで、校内の事務職員をゲストティーチャーとして、バティックの柄の意味やバティックの入手方法などを教えてもらうことにした。その結果、自分たちでもバティック



ハンカチ作りの様子

を買いに行きたいという思いを膨らませたので、近所にある地元のショッピングモールに出かけ、お気に入りのバティックを買うことにした。購入計画を立てる内に、買ってきたバティックで小学部6年生と中学部3年生に、バティックを使った卒業記念品を作るようになった。

2つの柄のバティックを購入した子どもたちは、家庭科で習ったミシンの使い方を思い出しながら、小学部6年生にはハンカチを、中学部3年生には写真立てを作成し、3月の卒業式の週に渡すことができた。また、その過程も含めてプレゼンテーション資料にまとめ、3学期の学習発表会で、全校児童生徒や保護者に自分たちの学びを紹介し、この学習を締めくくった。

4 おわりに

総合的な学習の時間は、どんな教材で年間通して学びを追究していくのか、毎年頭を悩ませていた。しかし、マレーシアでは、私自身が魅力的な教材とたくさん出会い、子どもたちと一緒に「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という追究のサイクルを経験することができ、総合的な学習の時間で何ができるようになればよいかということを学ぶことができた。欲を言えば、もっと現地の人々との交流をこのサイクルの中に入れていきたかったが、難しかった3年間だった。一つには、時数の制約がある。現地校との別のねらいを基にした交流や、様々な学校行事が在外教育施設にはある。国内の小学校では年間70時間ある総合的な学習の時間の時数が、在外教育施設ではそうではない。さらに、言語の問題もある。私自身がマレー語や英語で高度なコミュニケーションを進めることができなかったため、現地の方との交流の機会を設定できなかった。子どもたちにとって、現地語や英語でのコミュニケーションを円滑に進める力が身についていない中で、現地の人まで対象を広げて、自分たちの企画を発案することは心理的にも技能的にもハードルが高いようだった。こうした課題はあるが、その中で、どのように子どもたちに探究的な学びを経験させられるのかということは、難しくもやりがいのあることだと思う。今後、また機会を捉えて、その土地ならではの教材を見出し、子どもたちと共に探究できる、このようなチャレンジをしたいと私は考えている。